

「遠野三山」

野村直樹 名古屋市立大学人間文化研究所

むかす(昔)、あったずもな。ずーとむかす、母神様が三人の姫を連れて、この遠野さ遊びに来たたと。一日遊んで暗くなったから、来内(らいない)という所さ宿をとって泊まったんだと。そして寝るときになったとき、母神様は三人の娘を呼ばって、「今夜、三人の姫のうち誰かの胸さ蓮の花に似た麗華が下りるから、その蓮の花に似た麗華が胸さ下りた姫が一番いい早池峰(はやちね)のお山の神様になるように」ってしった(言った)んだと。そうしたところが、一番ばっち(末っ子)のお早という姫が、何としてもその早池峰のお山の神様になりたかったんだと。だから「誰の胸さ下りるんだべかー」と思って、ねった(眠った)ふりしてピカッピカッとまなこ開けて見てた。夜中になったところが、本当にねたくなってしまって、トロトロっとなったったところが、ハッと目を開けてみたところが、一番上の姉の姫の胸さその麗華が下りて、ピカピカピカピカと光ってだったと。それをそこーっと手伸ばして我の胸さもってきてのせたと。そして後はグーッスリ寝たたと。次の朝、母神様はそれを見て、始めっからお早の胸さその麗華が下りたものだと思ったんだと。だから「お六は六角牛山(ろっこうしさん)の神さまになったずず、お石はお石神の神様になったずず、お早が一番いい早池峰の神様になった」んだと。だから早池峰のお山の神様は、花を盗むことを許す神様なんだとさ。どんどはれ。

岩手県遠野に伝わる昔話「遠野三山」。現在その地で活躍する語り部、阿部ヤエさんが語ると上のようになる。柳田國男の『遠野物語』119話のなかでは第2番目に出てくるが、そこではもっと簡潔に書かれている。遠野の語り部ホールで、東北旅行中この阿部ヤエさんに出会って影響をうけた大学生がいる。向井初音さん(名古屋市立大学)は、自分の卒業研究に阿部ヤエさんを選んだ。ライブストーリーの研究といたらいいだろうか。ヤエさんについて学ぼう、ヤエさんをフィールドワークしよう、そう思った彼女は1年後再びヤエさんを遠野を訪ね、短い期間を一緒に過ごした。

「人は一生に一度だけ花を咲かせる。この話は一見人から花を盗んで自分の花を咲かせろと言っているように思えるが、そうではない。世界中のものはすべて神様のものだから神様からチャンスをいただくのだ。一番下の妹は、姉から花を盗んだのではない、自分自身でチャンスを掴んだのだ」とヤエさんは孫の年にあたる向井さんに説明した。「むかす、あったずもな」で始まり「どんど

はれ」で終わる形式だけで昔話だとはいえない。生きるための教訓を気持ちに込めて、相手の目を見て、体全体で表す。相手があなずくのにあわせて、人から人に語り伝えていくもの、それが昔話だとヤエさんは言う。そうでないものは、形式が整っていても、それらは世間話であると。世間話は今でいえば週刊誌の記事やワイドショーの題材のようなもの。固有名詞で語られるが、語られた本人にとっては迷惑なことも多い。世間話/昔話の分け方については、ヤエさんは学者の定義に異を唱え、生きる知恵を子どもたちに伝えようとしているかどうか、それが重大な違いであると考えている。

人間を研究する者にとって、おそろしいまでに、だれとどう出会うかは研究のかたちと質を左右する。向井さんのヤエさんとの遭遇は、彼女をして昔話を語ることにあつちかためて考えさせ、はからずもこれまで学者の多くが問題にしてこなかった視点に立たせた。つまり『遠野物語』に現れるストーリーのほとんどは(4話を除いて)、世間話であって昔話ではない。世間話は噂話の要素をもつもので、述べたとおり名をあげられた人には恥にもなる。一方、教訓を含んだ昔話は、子どもたちに伝える際、内容ばかりか話し手のアイ・コンタクト、表情、所作すべてが聴き手に伝わる。またそれらが聴き手にとっては生きる手本となるよう仕組まれている。炬燵の語り手はそういう伝承者だった。

そう踏まえると、昔話は標本として取り出したとたん、昔話でなくなってしまう。内容(テキスト)が、その語り方/状況(コンテキスト)と分離して扱われても、それは何の意味もなさない(またはいかなる意味にもなってしまう)。「語ること」+「聴くこと」があわさって1つのユニット(単位)を構成するのだ。相互作用しフィードバックする円環が意味をもち、この意味のループ、つまり回路に「こころ」がよっている。そういう回路をもった「語りの単位」(ナラティブ・ユニット)が昔話である。したがって、語り手と聞き手の間で会話が成立していない昔話などありえない。フィールドワークする聞き手が、「自分抜き」のデータを採取しても、それはピンでさして標本箱に納めた昆虫に似ている。

標本にはしかし標本のよさもあると主張する人がいるだろう。第一それは移動可能だ。そして複製も可である。上の「遠野三山」もそういう便利な複製なら『遠野物語』もそうだろう。文字で読んで十分強いインパクトを残す。そしていつのまにか『遠野物語』のストーリーが本物となり、その話と矛盾すると、「それは遠野物語に書いてはない」とばかりに贋物扱いする。標本は動かない、変化に対して無視を決め込んでいる。が、語りは聴き手を組み入れた意味の循環をいつも想定している。そしてその単位で機能している。

遠野滞在の最終日、ヤエさんは向井さんただ一人に向けて彼女の十八番「遠野三山」を語ったそうだ。「ヤエさんは私の目を見てゆっくり話した。私は金縛りにあったように相手の目を見て、うん、うん、とうなずくことしかできなかった。体中に言葉がじわーッと染み込んできて、あー、これが昔話の本来の姿なんだ、と思いながら私はいつのまにか泣きそうになっていた」。